出雲の阿國

（一幕三場）

人名

名古屋山三
腰元關屋（實は不破伴作）
石田治部少輔三成
前田中納言利家
大野修理之助治長
同　主馬之助治房
道外方
女方
唄うたひ
囃子方
若君拾丸
近習（大勢）
軍兵（大勢）

出雲の阿國
淀君
大藏局
和期局
饗庭局
玉の局
腰元（大勢）

第一場　淀城奥殿大廣間

日本中の頭痛の種であつた朝鮮征伐も愈々和睦の議熟して近きうち大明國よりの使者が大阪へ來るといふので人々ホッと息を吐いた其の半ば、文祿四年には天下に色々な椿事出來に及んだ。二月七日には奥州會津百萬石の領主蒲生飛驒守氏郷が京都で頓死せられた。實は太閤秀吉の寵臣石田治部少輔三成が小堀内膳に言付けて毒害したとの風聞である。其の七月十五日には、太閤殿下の養子たる關白秀次公が高野山に切腹仰付けられ、若君姫君をはじめ妻妾三十餘人は京都三條河原で打ち首となつた。これも石田三成が太閤殿下の思ひものゝ淀君と合體して秀次公を讒言

した故と言傳へられる。斯の通り石田と合體して秀次公を讒言せられた淀君は、自分の腹に生ませられた若君秀頼公を天下の跡目に立てん爲であつたが、計略圖に中つて眼の上の瘤たる秀次公は右の最後、さなきだに太閤殿下の寵愛深きばかりか、今は秀次公に代はつて當然天下の跡目たるべき秀頼公の御母として飛ぶ鳥も落ちんばかりの勢ひ。何時しか其の年は暮れて、翌くれば慶長元年五月五日の端午の節句、所は淀君の御住居たる淀の城の奥殿大廣間。そのころ都に持囃された出雲の阿國の歌舞妓踊を今日しも此處へ招寄せて御覽があるとのことで、腰元が褥や脇息を持運んで居る。

腰元○　やれ／＼御節句といへば何時でも大抵な忙がしさではないのに、取分け今日は歌舞妓踊の御見物で一段と眼が廻るやうぢやわいの。

腰元△　したが、眼の廻る代りには、其の眼にたんと保養をさす事が出來ようぞいな。

腰元○　ほんに其うで御座んす。歌舞妓踊は如何なものか、私等は未だ見た事が御座んせぬが、出雲のお國といふ女は、美人ぢやといふいかい評判ぢやわいな。

腰元△　踊よりも何んな美人か、其れが見たいものぢやが、でも稀有な事もあるものぢや。

腰元○　稀有なとは何が稀有ぢやぞいな。

腰元△　御方樣は大のお國嫌ひぢや御座んせぬか。あのやうな男たらしの買女は噂を聞いても胸が痛うな

る、四條河原を通つて檜太鼓が耳に入るのも身の毛がよだつと仰やつてぢやわいな。

腰元○　それは政所樣が、いかうお國を御贔負遊ばすゆゑ、御方樣の氣に召さぬであらうわいな。

腰元△　いや〳〵、其ればかりでは御座んせぬ。高い聲では言はれぬが、もう一つは御方樣の嫉み心が強いからで御座んすわいな。天が下に妾ほど美しい者は又あるまいと思召してぢやに、お國は美人ぢや〳〵と餘り評判が高いによつて、つる御氣に障るのであらうわいな。

腰元○　ほんに其の通りぢや。去年關白樣が切腹遊ばして、三十餘人の上﨟衆まで無慘の御仕置になされたも、聚樂御殿には數多の美女が居るとて御方樣の嫉み心が基であつたとやら。

腰元△　お國嫌ひも大かた其處らぢやと思ふのに、今日は何うした風の吹廻しか、此の御殿へ御呼寄せ遊ばしたは、何と稀有な事であらうがの。

腰元○　其う聞けば。ほんに稀有ぢや。其れとも和子樣の御慰みでは御座んすまいか。

腰元△　そなたは、何にを言やる。まば頑是ない和子樣に歌舞妓踊が何の玩具にならうぞいの。

腰元○　但しはお國を呼うで弄り物にしようといふ御方樣の思召かも知れぬ。

腰元△　まあ、其んな事でもあらうかいの。其れにつけても、美い女御に生れた者は苦が絶えぬ。

腰元○　結句私等のやうな於多福が果報かも知れぬ。

（二人が顏見合せて笑つて居る處へ、花道からけたゝましい音がして、朋輩の腰元が十四五人轉げるやうに息

を切つて此處へ駈込む。）

皆々　あれ、和子樣。てんがう遊ばすな。

同　何うぞ御免し遊ばしませ。

（口々に叫ぶ後から、今年四歳に成らせられる若君拾丸（秀頼の事）水干の裝束に額には菖蒲の鉢卷をして腰に菖蒲刀を下げ、菖蒲の兜巾と篠掛、子役の小姓大勢と一所に出る。）

若君　しやがめ〳〵。

（と言ひながら、片手に提げた菖蒲繩で腰元たちを打たうと追掛けさせられる。）

皆々　和子樣。御免し遊ばしませ。

同　あれ、てんがう遊ばすな。

（と皆が逃廻る。）

若君　しやがめ〳〵。

（と若君が其處らを追廻して居るうち、下手の襖を明けて老女大藏局に案内されて此處へ通つたのは石田治部少輔三成（三十七歳）若君は其れと氣付かず。）

若君　しやがめ〳〵。

（と言ひながら石田の片膝を菖蒲繩で打つ。）

大藏局　若君さま、石田殿を何となされまする。

若　君　おゝ治部か、人違ひぢや。免せ。

石　田　さては端午の節句にゝ下世話で致す菖蒲打をなされまするな。

若　君　其うぢや。そなたもしやるなら此繩を貸さうか。

石　田　あはゝゝ、わつけも無い事を。追て御父君と參内遊ばす御身でありながら、左樣なてんがう遊ばすと殿上人が笑ひまする。大藏殿。その菖蒲鉢卷を取つて御上げ召されい。

若　君　嫌ぢや〳〵。此の鉢卷を取りはせぬ。

大藏局　でも、石田殿が彼のやうに申されまする。

若　君　何ほ治部がいうても、此の鉢卷を取る事は嫌ぢや。さあ、皆の者は私と一所に來い。彼處で又菖蒲打して遊ばうぞ。

大藏局　其の菖蒲打よりも、追つゝけ此處で歌舞妓踊が始まりまするゆゑ、其れを御覽遊ばしませ。

若、君　いや、歌舞妓踊は見たうない。私は菖蒲打が大好きぢや。しやがめ〳〵。

（と言ひながら、又も腰元たちを追掛けて奥深く入らせらるゝ。後奏を見送つて）

石　田　あの寛濶な御氣性は上樣を其のまゝ。しかも菖蒲打なんど賤き者の業くれを好ませたまふ所まで御父君に似させたまひしは重疊ながら、既に秀次公の御例もあれば、餘り氣儘に御育て申すは却つ

て若樣の御爲めに成りませぬ。大藏殿。くれ〴〵も若樣への御敎訓を賴みまするぞ。して、只今聞けば、歌舞妓踊の催しが御座るとやら、それは眞事で御座るかな。

大藏局　淀樣が火急の御思立ちで、京都からお國を御呼寄せなされました。

石田　何、お國を。妾が大嫌ひは女歌舞妓と雷ぢやと仰せられた淀樣が。

大藏局　さ、妾も餘り不思議におもひまして、淀樣に左樣申したら、此れには些と仔細のある事ぢやと仰やつてゞ御座りました。

石田　むゝ、何はともあれ、最早御出座に間も御座るまい。拙者は此處で御待ち申すで御座らう。

（途端に下手から若き腰元が入つて來る。）

腰元　大藏樣、樂屋の支度はもう宜いさうで御座ります。

大藏局　支度がよくば御方樣の御出座遊ばすやう、大奧へ申して御くりやれ。

腰元　畏りました。

（腰元が立ちかゝるを、最前から眼も放さず見詰めて居た石田が呼留める。）

石田　こりや。待ちやれ。

腰元　は、何か御用で御座りますか。

石田　むゝ、此の者は拙者はじめて見受けましたが、何時から此の御殿へ奉公に上りましたな。

大藏局　確か、そもじは去年の冬からであつたの。

腰元　其の通りに御座ります。

石田　して、名前は何と申す。

腰元　私は關屋と申しまする。

石田　何ぢや、關屋ぢや。

腰元　左樣に御座ります。

（石田は熟と考へて）

石田　むゝ、關屋か。人住まぬ不破の關屋の板びさし。

關屋　え、何と仰やります。

石田　今のは新古今集の和歌ぢや。

關屋　私は又この節はやる歌舞妓踊の小唄かと思ひました。

石田　はゝ、たわいもない事の。もう用はないから行きやれ。

關屋　は。

（腰元關屋が心を殘して上手へ入つた跡で、石田は尙も思案して居る。大藏局は訝しげに）

大藏局　石田殿、心ありげな今の上の句、あれは何となされました。

石田　さ、合點の行かぬは今の關屋が面體。去年七月、高野山にて關白秀次公に殉死したる不破伴作に生寫しで御座るわ。

大藏局　え、其の伴作ならば音に聞えし秀次公の御小姓。

石田　蒲生家の名古屋山三と共に天下の美少年と唄はれた天晴名譽の者で御座る。

大藏局　如何さま。其の伴作が苗字を其のまゝに不破の關屋の板びさし。

石田　荒れにし跡は只秋風ぞ吹くといふ下の句も、秀次公の御最後を嘆いた心と讀めば讀まるゝ。

大藏局　其れではもしや。

石田　然し正しく生害したる伴作が再たび此の世に生きて居よう筈はなし、殊に男子と女性、此れこそ他人の空似で御座らうわ。

大藏局　でも、念の爲め關屋を此處へ呼寄せて。

石田　いや、其の詮議は却て無用で御座る。これ、大藏殿。

（石田は何か耳打する。大藏局は打頷いて）

大藏局　では、御殿の四方を。

（とあたりへ氣を兼ねながら、手を叩く。腰元下手から出る。）

腰元　大藏樣、御召で御座りますか。

（大藏局が耳打すると、腰元は立つて行く。入違ひに矢張下手から現はれたは大藏局が二人の子供、大野修理之助治長と同く主馬之助治房、何れも前髪たてた凛々しい若衆姿、石田と母とに一禮して）

修理之助　石田様。

主馬之助　母上。

兩　人　何御用で御座りまする。

大藏局　これ、修理も主馬も近う寄りや。

兩　人　はつ。

（と兄弟が進寄ると、石田は修理に、局は主馬に呼く。兩人は顏見合はせながら元の座に直り）

兩　人　委細畏まつて御座ります。

（と平伏する。途端に、上手の襖が明いて、淀君（廿歳）が出座あらせられる。つゞいて、和期局、饗庭局、玉の局、そのほか女房たちや、先きの腰元大勢がズラリと列ぶ。淀君は石田に眼をつけ）

淀　君　治部殿、おぢやつたか。

石　田　先づは式目の御慶めでたく中上げまする。

淀　君　して、御事は今日の催しを知つて御ぢやつたか。

石　田　いや、別にあなた様の御耳へ入れたい儀が御座りまして參上致しました。

淀君　妾の耳に入れたいとは。もしや上樣の身の上に御變りでも。

石田　いや、上樣に何の御變りは御座りませぬが、故蒲生飛驒守後室の儀につきまして。

淀君　むゝ、氏鄕の後家が何としましたのぢや。

石田　かねゞ〳〵あなた樣にも御存知させられまする如く、上樣、會津表より內々の御召寄せにつき、昨日着京、今日早速伏見へ登城。上樣御對面遊ばさるゝ筈で御座ります。

淀君　其の氏鄕の後家は信長公の娘、妾とは從姉妹同士。此の度の御召寄せは、上樣いつもの惡性ゆゑ、人質にするというて伏見に引留め、眞事は綾屋の伽にしようといふ御心に極まつた。

石田　拙者も左樣に存じまするによつて、內々あなた樣の御聞きに入れる次第に御座ります。

淀君　さりとて妾は何の嫉しうも思はぬ。妾の母上小谷の方は信長公の御妹御、言はゞ氏鄕の後家は妾よりも眼上ながら、妾は拾丸といふ天下の世嗣の母ぢや。もし亦蒲生の後家が如何ほど美しいとて妾よりも年上ぢや。上樣今日の御對面により假令會津の姥櫻を伏見に手活けとなされうとて、妾に御見替へ遊ばす道理はない。其れゆゑ妾は芥子程にも思はぬ。然し山三に此の事を聞かせたら、妾を賴み甲斐もなう思ふであらう。

石田　あなた樣は山三と仰やりまするか。

淀君　蒲生浪人の名古屋山三、今ごろ洛中にみやび男と噂の高い彼の山三が妾へ切なる願ひ。飛驒守が

歿後も故主の家に何事ないやう、上樣へ取りなしてくれと、賴うで居るわいの。

大藏局　其れに、氏鄕樣の後室が上樣の御寢間の伽をなされうなら、山三殿は味氣ない事で御座りませう。

和期局　今日も歌舞妓踊の見物に山三殿を御呼びなされました程に、追つけ此處へ見えるで御座りませうが、後室樣の事を聞いて、彼の美しい眉の間に皺の寄るのが御氣もじで御座ります。

石田　さては今日の歌舞妓踊は山三に見せうとての御催しで御座りますな。

淀君　其うであつたら御事は何としやる。

石田　聞くさへ苦々しう存じまする。如何さま、其の山三は飛驒守が小姓の時よりあなた樣御眼かけさせられ、上樣名古屋御出陣の御留守にも度々御召寄せられたとは申せども、今は主なしの浪人もの、天下御世繼の母君たるあなた樣の御側近く召させられまするは非禮の第一。ことに彼めが故主は上樣御不興の蒲生家といひ、浪人してより洛中に風流なる活計を營み、或ひは禁裏仙洞の上臈、或ひは公家武家の女房たちと、淫らなる噂數を知らず。斯かる輩の當御殿に出入いたすは世間の批判も如何で御座りまする。

淀君　治部殿、その諫言だて措いてたもれ。

石田　何と仰やりまする。

淀君　浪人を近づけるのが何の非禮。今の國取大名に、昔浪人ならぬ者が幾人あらうぞ。其ういふ御事

とて、元は近江の國觀音寺の兒小姓であつたを、上樣が御見出しなされて武士に仕立てたとの御物語ぢや。又御事は世間の批判を氣に御しやるが、太閤殿下の思ひ者、且つは若君の母なる妾に對つて、誰が如何なる批判を加へよう。日本は愚か、大明朝鮮までも打靡かせ給ひし吾が夫とても、妾の心は妾の儘に遊ばすよりほかは無い。もし亦山三といふ風流男を妾が側に引付けたとて上樣が御不興なら、妾も上樣に申す事は山々ある。今もいふた通り、妾に嫉み心はさら〳〵無けれど、氏鄕の後家を召し寄せられて今日の御對面は何事ぞ。去年秀次殿成敗とても、菊亭右大臣殿の息女を横取された御憤りが、上樣の御決斷を早めた事は御事も知つて御居やる筈ぢや。

石田　さりながら、其處が男子と女性との違ひ、よし上樣が愼ましからぬ御行狀を遊ばせばとて、あなた樣まで瓜田に履を容るゝ御振舞は、憚りながら穩かならぬかと存じまする。

大藏局　これは石田殿の仰やる事に理があるやうに思ひます。

淀君　大藏までが其のやうな、妾に淫らな事があると言はぬばかりの口振。聞捨てには出來ぬぞよ。

石田　いや、聊以てあなた樣を疑ふのでは御座りませぬが、人の口には戸が立てられぬといふ下世話の譬。

淀君　でも、妾は其の人の口に兒んごと戸を立てゝ見せようぞ。人を生かす殺すさへ心の儘なりや、其れほどのこと妾にはいと易い儀ぢや。

石田　假令口には戸が立ちましても、其の人たちの心の疑惑は何と致方が御座りますまい。

淀君　如何に人が疑はうとも、妾さへ潔白なら構ふことか。花紅葉の色を愛で、蘭菊の香りにあこがれるを、誰か淫ら心と言はうぞ。妾が山三を近づけるは丁度其れと同じぢやわいの。

石田　これは近ごろ興ある御詞。花紅葉の色、蘭菊の香りが山三とは。

淀君　でも妾には其う思へるのぢや。

石田　さりながら、山三は草木で無うて人で御座ります。色香のほかに心といふものを持つて居ります。色香ばかりはあなた樣に捧げても、心は疾うに人の物で御座ります。

淀君　え、山三が心は人の物。その人は出雲の國ぢやと御言ひやるのであらう。

石田　如何にも其の通りで御座ります。彼れめに喉かされた女性は、是れまで數知れぬうち、國ばかりは山三の方でも心を許した深い仲ぢやとの專らなる世評。しこ其の通り心の露は仇なる人に吸取られ、只殘んの色香ばかりを愛でさせて、あなた樣は御滿足に思召しまするか。

淀君　いや、其の心の露までも妾が吸はうと思へば、國などは蚊弱き蝶の飛ばすも逐ふも身の勝手ぢやわいな。妾の威勢で何一つ心の儘にならぬ事はない。近き例は、秀次殿はじめ聚樂の誰れ彼れを。

大藏局　あ、これ。何と仰やりまする。

（大藏局が押止めたを、遙か末座に控へた腰元の關屋がヂロリと見る。そうして其の關屋の方へ石田の眼が屹

と注がれた。）

淀君　國が如何に美うても、強い者は矢張妾ぢや。して山三は強い者に便らねば成らぬ身ぢやほどに、山三といふ天秤に妾と國とを掛けて見たら、妾の重いのは定ぢや。歌舞妓踊に事よせて、此處へ山三と國とを呼うだのも、在りやうは其の天秤の目方を量る爲めぢやわいの。

石田　さすれば、山三があなた樣に附くか、お國に附くか、其れを試めさん爲めの今日の催しで御座りますな。

淀君　お國嫌ひの妾が歌舞妓踊を呼うだ仔細は其の通りぢや。皆にも合點が行つたであらうの。

大藏局　しかし、山三殿が阿國を捨てゝあなた樣に附きましたら愈々大事で御座りまする。

淀君　大藏、心配しやんな。妾は山三といふ花を手折らうとは言はぬ。色香を愛つる其の花が何時でも手折れると思へば、其れで滿足ぢやわいな。

石田　如何さま、あなた樣の御心は拙者に能く分りました。斯ほどまで奥底深き淀樣なればこそ、太閤殿下にも並々ならぬ御覺え。

淀君　治部殿とした事が、妾を弄り物にして御くりやるな。したが、妾と國とが今此處で山三の秤に掛かれば、伏見の城でも、矢張妾と蒲生の後家とが上樣の秤に掛るのぢや。其の秤目も妾の方が重いと知れては居るが、でも、樣子が聞きたいわいの。治部どの。御事は是れから直ぐに伏見へいて、

其の消息妾に知らしてたべ。

石田　仰せまでも御座りませぬが、拙者とて此處の秤り目が見たう御座りまする。

淀君　其の秤り目よりも、秤にかゝる國の顏が見たいので御ぢやらう。

石田　これは如何な事。

淀君　歌舞妓踊は御事の歸りやるまで往なさぬほどに、早う立つてたべ。

石田　然らば、後刻又御眼にかゝりまする。大藏局。先刻の事な。（と互に顏を見合せ）さらばで御座る。

大藏局　これ修理と主馬。そち達は石田殿を御見送りしや。

（と眼くばせする。）

兄弟　は。

（淀君はじめ一同に會釋をして立上る。石田をはじめ三人は腰元關屋に心を置いて花道へ退出する。此の時丁度舞臺の方で鳴物の音が聞こえる。）

淀君　もう踊が始まりさうぢやが、山三は何として遲い事であらう。

（途端に花道から、侍が入つて來て）

侍　名古屋山三、只今參上いたして御座ります。

（大藏局は淀君の御意を伺つて）

大藏局　御方樣が御待兼ねぢやほどに、直ぐ此れへ御通しやれ。（待は再び出て行く。）腰元關屋、山三殿を出迎ひしや。

關屋　は。

（關屋が花道の際まで出迎ふと程もなく、天鵞絨のやうな五分月代に伊達な衣裳の好み、しづ〳〵と花道から出て來たは此れなん日本一の風流男と唄はれた名古屋山三。その時廿歳の若者である。）

關屋　山三殿、あれへ御通り成されませ。

山三　御出迎ひ恐入つて御じやる。

（と山三は關屋の顏を見て驚く。關屋は俯向く。）

山三　然らば御免下され。（と何氣なき風にて御前へ通る。）これは〳〵、淀樣はじめ、方々には御出座に御座りまするな。

淀君　山三。いかう遲かつたのう。

山三　計らず遲參の段、平に御免下さりませ。

淀君　今日はそなたに見するものがある。待兼ねて居たわいの。

山三　某へ拜見仰付けられまするとは。

淀君　そなたの大好きなものぢや。それ、彼の庭へ舞臺をしつらへて、國が歌舞妓踊を見せるのぢやわ

いの。

山三　其の歌舞妓踊が某の大好きとは合點が參りませぬ。

淀君　いや、踊ではなうて、國が大好きぢやといふ事ぢやわいの。

山三　愈以て某には覓えが御座りませぬ。

淀君　皆見やれ、山三が彼のやうな眞面目くさつた顏をして。

和期局　幾ら隱しても其の隱すより顯はるゝぢやわいな。

饗庭局　山三殿と國とが深い仲ぢやといふ事は御方樣も疾くに御承知。

玉の局　それを知らぬ顏して居やるのが憎らしう御座ります。

山三　これは近頃迷惑千萬な。成程世間では左樣な噂も致すさうに御座りますが、某は一向存ぜぬこと。如何さま、友達の附合で、二三度ばかり四條河原の芝居へ參りましたのを、誰やらが尾に鰭をつけて、左樣な風評をいたしたものと見えまする。

淀君　其れが定ぢやと御言ひやるな。

山三　定で御座りまするとも。さいつ頃より、あなた樣へも御願ひいたして居りまする某の故主蒲生家の儀につきまして、此の頃は寢食さへ忘れたる有樣。左樣な淫らな事を致さう念も無ければ、暇とて御座りませぬ。

淀君　そなたが達つて左樣に言ひやるものを、くどうは責めまい。したが、蒲生家といへば、愈々飛驒守の後室が會津からわせられて、今日伏見の城で上樣に對面との事ぢや。

山三　某も其の儀を承りまして、萬々一、上樣が事を左右に托して御引留め遊ばされ、御部屋にも御取立て遊ばさるゝやうな儀が御座りましては、故飛驒守の恥辱、まつた蒲生一家の瑕瑾。さりとて、無下に其れを斷はつて上樣の御怒りに觸れなば、會津百萬石の知行にも拘はる次第、と憚かりながら心痛いたして居りまする。

淀君　其うであらう。妾も今石田殿から始めて聞いたのぢやが、御對面ある上からは、人質というて引き留めて御寢間の伽にしようと仰しやるは知れたこと。でも、妾が口を出しては嫉んで妨げするやうに他から思はれるが術なし、そなたには賴み甲斐のない者とさげすまれても、此ればかりは淀が勝手にならぬわいの。

山三　もう是非が御座りませぬ。然しながら、如何に恥辱とは申せ、操を破つて操を立つるの道理。其れで殿下の御心さへ御解け遊ばせば、蒲生の行末の爲め却つて仕合せかも知れませぬ。

淀君　其う諦めるより仕樣はあるまいわいの。兎に角今度の事は妾の心に任せぬが、此の後とてそなたに賴まれた事は仇愚かにせぬつもりぢや。蒲生家の爲め、殊にそなたの行末につき、隨分上樣の前を取りなさうぞ。

山三　何分ともに宜く御願ひ申しまする。

淀君　決して心置きなく思ふたが宜い。

山三　あなた樣に何の心を置きませうぞ。

淀君　心を置かぬが定なら、もつと近く寄りやいのう。

山三　でも、餘りに御側近く寄りましては恐多う御座りまする。

淀君　恐れ多いとは、それが妾に心を置いて居る證據ぢや。さ、ずつと、此方へ來やいのう。

山三　でも、狎れ〳〵しう致しまして、御局たちの手前も如何で御座ります。

淀君　斯れほど言うても他處々々しくしやるのは、局たちの前よりも、國の前を憚るのであらう。そなたが妾の側に近寄ると、舞臺から國の睨むのが怖いのであらう。

山三　又左樣な御無理ばかり。國とは何の譯もないものが、怖い事は御座りませぬ。

淀君　では、近う寄りや。さ、此處へ來や。

山三　然らば御免下さりませ。

淀君　其の挨拶がまだ心を置いて居やるのぢや。今日は無禮講ぢやほどに、誰にも遠慮は無いわいの。

（山三は淀君の側近く座る。途端に簾を隔てた舞臺から小唄が聽こえる。）

唄「吾が戀は月に叢雲、花に風とよ、細道の駒かけて思ふぞ苦しき。」

淀　君　あの唄は誰の心であらうの。

山　三　大かた某の心で御座りませう。

淀　君　そなたが誰に戀をしやらうぞ。戀は女のするものぢやわいの。

唄「山を越え、里を隔てゝ、人をも身をも忍ばれ申さん。」

大藏局　あれ〳〵、彼の天冠をかぶつて腰に瓔珞を垂れたのが國で御座ります。

和期局　成程色が白うて頰がムツチリして、噂に聞いたより美しい女御ぢや御座りませぬか。

淀　君　喧しい。そなた達には彼れが美女と見えるかや。

和期局　いや其れほど美女とも思ひませぬ。

淀　君　でも、山三。そなたには美女に見えようの。

山　三　如何さま、四條河原で見物した時は美人ぢやと思ひましたが、あなた樣の前へ出ましては、月夜に星の光が薄いのと同じで御座ります。

淀　君　でも、星の光の方がそなたは可愛いかろ。

山　三　いや、とても照らされるものならば、月の光が好もしう御座ります。

淀　君　其れはほんにか。（と山三の側へ寄らうとして）あれ、其の星が此方を睨んだわいの。星は瞬くものと聞いたが、睨んだ星は始めてぢや。

大藏局　あれは踊の振で正面を向いたので御座ります。

淀　君　其うではない。山三が妾に口を利いたからぢや。あれ〳〵、又星が睨んで居るわいの。一層の序でに此方を睨み通しにさしてくれうわいの。

（淀君、山三の側へ寄添ふ。）

唄「中々に小唄に節とは思ひ候へど、夫れ吹く笛は宵の慰み、小唄は夜なかの口ずさみとよ。曉つきかたに思ひこがれて吹く尺八は君にいつも添ふてふ（双調）、別れて後は又逢ふしき（黄鐘）とよ。」

淀　君　あれ見やれ。國が此方を睨んで嫉ましさうな顔わいの。

大藏局　それは皆あなた樣の御氣の故で御座ります。

淀　君　氣の故でも、妾は彼の嫉ましさうな顔が踊よりも面白うて成らぬ。

（淀君は又山三に寄添ふ。）

唄「春雨の打ちしほれたるを見るにつけても、此の春ばかりにとよの。」

（唄ふ半ばに、末座に控へた腰元闘屋が不意に立ち上がつて、懐劍逆手に持つたまゝ、淀君眼かけて飛びかゝる。大藏局をはじめ女房たちが立上がり淀君をかばふ。此の騒ぎで舞臺の唄はバツタリ切れて、けたゝましい足音がする。）

局たち　狼藉者ぢや、侍衆、出合ひめされ。

（局たちが聲々に叫ぶと、左右から最前の大野修理之助と主馬之助との兄弟が甲斐々々しい出立で駈込む。）

修理之助　腰元關屋と名乘つて淀樣を狙ふ汝こそ。

主馬之助　實は秀次公の御小姓不破伴作であらうがな。

（此の間に女房腰元たちは淀君を警護して奥へ入る。山三ひとり悠然として伴作を見詰めてゐる。）

伴　作　如何にも、吾こそは故關白秀次公の身内にさる者ありと知られたる不破伴作なるわ。太閤殿下に秀次公を讒言せし淀の方を打取つて主君の怨みを晴らさん爲、去年高野山に於て切腹せしと世上の風聞を幸ひ、當城内へ入込み、今日の催しに紛れ、本望遂げんとせし甲斐もなく、淀の方を打損じたるか。無念至極。

修理之助　姿は女ながら、面體正しく伴作に相違なければ、非常を警護せよと石田殿の指圖により、

主馬之助　吾れ吾れ兄弟軍兵を以て四方を取圍みたれば、最早逃れぬ。覺悟いたせ。

伴　作　此の上は死者狂ひ。片つ端から撫斬にせん。

（伴作は二人を相手に劇しく戰ひながら入る。山三立上つて後姿を見送り、冷やかなる笑を洩らす。）

第二場　同歌舞妓踊舞臺

此の奥殿に對つた庭先には今日の催しの爲めに舞臺がしつらひてある。舞臺では丁度阿國が藝のはずんだ最中、此の椿事が出來したので、皆が樂屋へ逃込んだが、怖い物見たさで、揚幕の内や臆病口から這出したり、顔だけを覗かしたりして、顛へながら騷ぎの樣子を見て居る道外役者や唄うたひや囃子方が幾人もある。

道外方　あれ〳〵、わつけも無い。女ひとりに切まくられて大の男が逃げるわ〳〵。

女　方　あれは女ぢや無うて男のやうぢや。

唄うたひ　では、丁度そなたのやうに女方でもあろかえ。

囃子方　あれ、侍が又切られたわ。サッと血が迸つた。

道外方　それ佛倒れに倒れたわ。

女　方　如何さま、そなたが舞臺でする佛倒れよりも餘程上手ぢや。

唄うたひ　あれ〳〵、大勢の侍が又押し寄せして來をつた。

囃子方　それ、血刀さげて此處へ駈けて來るやうぢや。

道外方　側杖くふな。逃げやれ〳〵。

（皆が慌てゝ樂屋へ逃込む。すると、伴作は髮をおどろに振り亂して、顔や手足に數多の傷を受け、血みどれになつて、片手に血刀さげて、よろめきながら舞臺を眼がけて逃げて來る。後からつけて來た軍兵が打つて掛る。

其をあしらひながら舞臺の側へ來て、勾欄に手をかけて飛上る。柱を後楯に取つて又切合ふ。其のうち、軍兵が次第々々に增すのを終に逐拂つてしまふ。獨りになつて、氣が弛んでタヂ〳〵となる處へ、左右から修理之助と主馬之助とが再び現れる。後から先きの軍兵大勢が續く。伴作は其を見て屹となつて刀を杖に立上る)。

修理之助　死際きたなき不破伴作。

主馬之助　此上は首を渡すか、但しは繩にかゝるか。

兩人　覺悟なせ。

伴作　何を小癪な。いで、汝等も冥途の道連れ。

(又切合はうとする所へ)

阿國　待つた、待つて下さりませ。

(と樂屋から、舞の衣裳のまゝで出雲の阿國が駈けて出で、伴作を自分の袖でかばふ。頭に黃金の天冠を戴き腰には瓔珞を纏ふ。)

修理之助　やあ、そちは出雲の阿國ぢやな。

主馬之助　謀叛人をかばひ立てして後悔するな。

阿國　かばひ立てしたら何で惡からう。此處は淀の方樣の御殿でもない、太閤樣の御城でもない、此の國が歌舞妓踊の舞臺ぢやわいな。四本柱は、多聞、地國、廣目、增長の四天を表はし、木戸の櫓は

城に形どりて、五本の鎗と陣太鼓とは軍の眞似事。私の爲めには此の舞臺が藝道の城廓なりや、其の城廓に楯籠もつては天下も將軍も眼の中に無い。貴賤高下、善惡邪正、一切皆平等。何ほ謀叛人ぢやとて、私の懷ろへ駈込んだら誰にも指をさゝす事ぢや御座んせぬ。それとも手出しがしたいなら、此の國から先へ何とでも成されませいな。

修理之助　河原者の分際で無禮至極。者共。かゝれ。

（再び軍兵共が切つてかゝらうとする。）

利家　方々、早まられな。前田利家、只今それへ參るでござらう。

（中納言前田利家公威儀を正して此處へ出で來る。大野兄弟はじめ一同恐入つて會釋をする。）

利家　仔細はあれにて承はつた。如何さま舞臺を己が城廓と心得たる國の心がけは天晴ぢや。斯ほどまで藝道の規模を重んじてこそ天下に一人の女とも呼ばれるのぢや。國。此の利家は、武士にも稀なるそちが心底にめでゝ、其れなる伴作はそちの差配に任するぞ。

阿國　御情ぶかき御詞、有難う存じまする。其の御情に甘へまして、改めて國から御願ひが御座ります。

利家　願ひとは何ぢや。

阿國　御覽の通りの深手なれば、最早太刀打も叶ひますまい。さりとて、敵に首を搔かれたり、生捕となるのも無念に御座りませうほどに、此の上は只切腹のほどを御許し下されませ。

利家　むゝ、許す。

阿國　伴作殿、今のを御聞きなされたか。

伴作　お國どの。御身の取なしは忝ない。見事切腹して秀次公の御跡を追ひ參らせう。したが、此の御殿の中に、某が介錯を賴む人たつた一人御座る。

利家　誰ぢや。名を申せ。

伴作　蒲生家の浪人名古屋山三に介錯がして貰ひたい。

利家　むゝ、其の山三とやらを呼べ。

（一人の軍兵が立つて行く。）

伴作　さらば切腹。關白秀次公の御小姓不破伴作、生年十九歳の最期、武士の手本に皆々見て御きやれ。

（伴作腹へ刀を突込む、此處へ山三が駈付ける。）

利家　蒲生家の浪人名古屋山三とはそちか。

山三　御意の通りに御座ります。

利家　これなる伴作の望みぢや、其の方介錯して取らせ。

山三　畏まつて御座ります。

（山三は正面の階段を踏んで舞臺へ上り、お國に目禮して伴作の側に寄る。）

山三　身共は名古屋山三ぢや。望み通りそちの介錯致すぞよ。

伴作　むゝ、山三か。忝ない。

山三　伴作。能う御聞きやれ。そちと吾れとは天下の美少年と言はれた二人。そのふたり共、去年は主君を喪ひ、今亦そちが吾れの手にかゝるとは離れがたなき宿世の緣ぢやのう。

伴作　最前、そちに顏を見られた時、スワ身の一大事と思ふたが、能うこそ知らぬ振してくれた。此の伴作、今はの際に禮を言ふぞよ。

山三　其の禮には及ばぬ。そちといふ事は身共が言はいでも、あの才覺者の石田がずんと見通ほしぢや。

伴作　さ、其の石田めが氣取つたによつて、事を急いで此の不覺を取つたのぢや。

阿國　不覺は取らしやんしても、侍らしう死なしやるのぢや。

山三　伴作、そちは滿足であらう。

（伴作莞爾とうなづく。）

山三　吾れは不覺を取らぬ代り、何時までも侍らしうなう生きるのぢや。

（と阿國の顏を見る。）

伴作　御身は何といふぞ、もう耳が聽こえぬ、介錯賴む。

（山三は肩衣ぬいで後ろへ立ち、刀を拔く。阿國は側に合掌する。）

第三場　元の大廣間

大廣間には淀君が再び出座あつて、今しも伏見から歸つて來た石田に對面あらせられる。最前の騷ぎから神經過敏にならせられた樣子。側には大藏局をはじめ女房腰元が附添うて居る。

石田　さりながら、淀樣の御身の上に何の變りもなうて重疊に存じまする。

淀君　其れも御事と大藏とが計らひゆゑぢや。

大藏局　あの關屋が石田殿の御眼に留まらずば、如何な大事にならうも知れませぬ。ほんに危い事で御座りました。

石田　然し、此の後とても決して御油斷はなりませぬ。あなた樣や拙者に怨みを懷いた者が無いでは御座りませぬゆゑ。

淀君　治部殿。そのやうな事いふて妾を驚かして御くりやるな。今の騷ぎさへ膽を冷したわいな。

石田　はゝ、淀樣の日ごろにも似合はさせ給はぬ臆病さ。

淀君　でも、妾は臆病で御ぢやるわいの。臆病なればこそ、蒲生の後家に上樣を寢取られはせまいかと

御事の御歸りやるを待兼て居ましたのぢや。

石田　最前の御詞にも似合はぬ事。したが、上樣今日の御對面は思ひのほかの首尾で御座りました。

淀君　思ひのほかとは。

石田　飛驒守の後室は剃髮いたいて居りました。

淀君　何、尼になつたとや。

石田　如何にも、綠の髮を剃りこぼちて、白無垢の上に黑き法衣を着けて居りました。これは上樣の御難題を免れんとて思ひ設けた計り事に違ひは御座りませぬ。上樣も其れを御覽遊ばして意外の御樣子で御座りましたが、其の心底ならば吾等も氣遣ふ事は無い、早々國へ歸りやれとの御仰せ。

淀君　では、今日の對面は何事なう濟んだので御ぢやるな。

石田　さ、後室が下られてから、其れとなく上樣の御腹立は一方なりませぬ。蒲生家の世繼ぎは幼少なれば、會津といふ關東の要害を預け置く事不安心ゆゑ、其の百萬石を公儀へ預かり、野州宇都宮へ十八萬石にて處替へを仰付けよとの御詞で御座ります。

淀君　では、後室が手に入らぬ腹癒せに、知行を削つて處替へを遊ばす御所存とな。

石田　まだ表立ちての御沙汰は出でませねど、あらまし其の通りに御座ります。

淀君　能う知らせてたもつた。妾が其の沙汰は屹度止めて見せよう。

石田　飛驒守が跡目をさほどおかばひ遊ばすは、山三からの頼ひゆゑで御座りませう。

淀君　それのみでは無い。後室が尼となりやつたしほらしさに、妾は是れから蒲生家を贔負にするのぢやわいな。

石田　如何さま、伏見での秤目は、あなた樣の御相手が尼になつたゆゑ、其れきりになりましたが、して此方樣の秤目は何となされました。

淀君　最前の騷ぎでまだ何とも能うせぬが、追つゝけ國が此處へ參る筈ぢやほどに、是れから秤にかけて見ようわいの。

（腰元が入つて來る。）

腰元　國は御次ぎまで參つて居りまする。

淀君　これへ通しやれ。

（程なく腰元に案内されて阿國が入つて來る。最前の舞臺姿とは變つて此れは一段とあでやかな當世風、末座に坐つて平伏する。）

淀君　今日は大儀であつたのう。

阿國　拙い業くれを御眼にかけて恐れ入りまする。其れに、折角の御催しも濟まぬうち、只今の變事で殘念に存じます。

淀君　いや、あれだけでも面白う見物したわいの。褒美としてそなたに盃やらう。

（腰元が銚子盃を持運ぶ。阿國は盃を受けて飲む。）

淀君　そもじは名古屋山三といかう深い仲ぢやとの噂ぢやが、好い男を見付けて仕合ぢやの。

（淀君試すやうにいふ。）

阿國　えゝ、何の其のやうな事が御座りませう。ほんに世間の噂ほど當てにならぬものは御座りませぬ。

淀君　これ、隠しやんな、最前そもじが舞臺から此方を見やつた眼が口を利くわいの。そもじぢやとてうぶの姫御前ぢやあるまいし、山三との仲は是れ〳〵ぢやと、妾に打明けても宜さゝうなものぢや。

阿國　でも、其れを打明けたら、其處らの御方に御氣もじて御座ります。

（阿國當付けていふ。）

淀君　はて、由ありさうな詞ぢやの。此處に居る者は妾と妾の女房たちばかりぢや。其れに何の遠慮が入らうぞ。

阿國　でも、遠慮いたしまする。

淀君　そもじはいかう口の堅い女御ぢや。では、妾が誓文しよう。そもじが山三と深い仲ぢやといふ事を打明けたら、今日の褒美に山三を晴の夫に取持たう。

阿國　其れはまあ眞實で御座りますか。

淀君　妾が何で詐を言はうぞ。淀の川瀬の水車が逆に廻る法もあれ、妾の誓文に變りはない。屹度夫婦にして遣るから、山三と深い仲ぢやと言ふたがよい。

阿國　あい、言ひまする。まこと山三樣と私とは二世かけた深い仲で御座ります。私が山三樣を思ふて居れば、山三樣も私を思ふてゞ御座りますわいな。

淀君　屹度さうぢやな。

阿國　あいなあ。今日の踊も、あなた樣の御側に山三樣の姿が見えたので、いとしい彼の人の前ぢやと思ふたら、斯う氣がいそ〳〵として、常より一層藝がはずみましたわいなあ。

（と見せつけがましくいふ。）

石田　淀君。こりや些と秤目が違ひさうで御座りますな。

大藏局　國とした事が、御方樣の前で餘りな物のいひやう。

阿國　でも、淀樣が何も彼も打明けいと仰やりますもの。

淀君　國がそれほど思ふ男ぢやもの、誓文通り山三と添はして遣らう。

阿國　忝う御座ります。

淀君　そもじは山三と添ふのが其れほど嬉いか。

阿國　嬉い段では御座りませぬ。

淀君　でも、妾が何ほ添はせたうても、山三が嫌ぢやといふたら何としやる。

阿國　山三樣が何の嫌ぢやと言はしやりませう。

淀君　深い仲なら其うありさうなこと。さらば、妾が前で山三と夫婦の盃させよう。山三を呼うで來やれ。

（腰元が立つて行く。つゞいて山三が入つて來る。）

山三　そなたは日本一の嘘つきぢやの。國の口から何事も聞いたぞよ。そなたと國と深い仲ぢやとの事ゆゑ、妾が取持つて此の場で夫婦の盃さすのぢや。其の盃を山三に取らせい。

山三　これは近頃迷惑な儀で御座ります。某と國とは何でも御座りませぬ。

阿國　山三樣。そりや詞が違ひませう。

山三　詞が何で違ふ。そなたと身共とは他人ぢや。それに、深い仲ぢやなぞと能くも淀樣の前でいふたな。折角の仰せで御座りまするが、盃などゝは思ひも寄りませぬ。

阿國　山三樣。眞實お前は其のやうな氣かいなあ。

山三　此の山三に對つて狎れ〳〵しい口の利きやう止しにしやれ。

（淀君小氣味よげに）

淀君　國、そもじこそ妾に嘘を言やつたの。山三は他人ぢやと言ふて居るわいの。あ、其うであらう。

そもじのやうな女御に戀する山三では無い。のう、山三。そなたの肩には蒲生家といふ重い荷が掛かつて居る。そなたとて武士に歸つて立身せにや成るまい。それには此の淀といふ後楯で無うては叶はぬ。如何に天下一人の女御ぢやとて、國、そもじが念佛踊の御利生で山三を知行取りにする事は出來ぬ。まして蒲生家といふ百萬石の跡目をそもじのやうな賤い者が何とし得よう。すりや、山三は妾に付かうとも、そもじの物には能う成るまい。

（阿國口惜しさに忍泣する。山三ずつと阿國の方に眼を注ぐ。）

山三　そもじは泣いて居やるの。

阿國　いや泣いては居りませぬ。

淀君　でも、皆見やいの。國が彼のやうに眼を眞つ赤にして。山三がそもじの物にならいで口惜いか。

山三。國を慰めてやりやいのう。いや、其れも他人なら是非に及ばぬ。

石田　如何さま、此れは淀樣の秤目が重いと見えまするな。

大藏局　あつたら御方樣が夫婦の固めをさせうと思召した其の盃も無用で御座りました。

淀君　其うぢやの。治部殿が退屈でわせられるゆゑ、盃を彼方へ廻しや。

腰元　は。

（腰元が山三の前にある盃を石田の方へ運ばうとする。阿國泣伏す。山三見兼ねて）

山三　いや、國からの其の盃、某が御受け致す。

阿國　え。

（と國は驚く。）

淀君　國の盃を受けるとは。夫婦の固めをしやるのか。

山三　如何にも。淀樣の御取持により、名古屋山三、改めて國と夫婦の固めを致しまする。

阿國　其れは本間で御座んすか。

山三　はて、可愛いそなたに何で嘘を吐かう。最前他人ぢやといふたは詐ぢや。

阿國　其れでは眞實私と夫婦になつて。

山三　くどい事の。さ、固めの盃。なみ〳〵と注いでもらひませう。

阿國　あゝ、嬉しう御座んす。

（山三盃を口につける。）

淀君　山三。そなたは本性で其のやうな事いやるかや。

山三　某本性に御座ります。

淀君　して、此の淀が不興ぢやといふたらば。

山三　でも、致方が御座りませぬ。

淀君　其れでは、妾が勘氣に觸れても構はぬと御いやるのぢやな。そなたは豫ねゞ、此の淀に願うた事を忘れやつたか。武士に歸つて出世がしたいゆゑ、上樣に宜う吹聽してくれと御言ひやつたであらう。

山三　如何にも左樣に申しました。

淀君　上樣の御不興受けた蒲生家ゆゑ、其の跡目が心元ない程に、此れも取りなしてくれと御言ひやつたでは無いか。

山三　如何にも左樣に申しました。

淀君　其の蒲生家は、飛驒守の後家が今日伏見の對面に尼姿で居たとて、上樣以ての外の御憤り、會津百萬石を公儀へ預りて、野州宇都宮へ只つた十八萬石で處替への、内々御沙汰があつたといの。上樣に縋つて其の御沙汰を止めるのは、妾より他に誰がしようぞ。でも、そなたは妾が不興しても構はぬと御言ひやるか。

山三　何とも是非に及びませぬ。

淀君　そなたは氏鄕の頓死が訝かしい、相手を探つて敵が打ちたいと御言ひやつた。妾の勘氣に觸れたら、其の望みは皆水の泡であらうぞや。

山三　某の望みは始めから水の泡で御座ります。

淀君　何と言やる。

山三　淀様、眞こと山三はとうの昔武士を止めました。

淀君　えゝ。

山三　武士を止めれば忠義も手柄も御座りませぬ。あゝ、思ひ出せば、某十五歳の冬、奥州名主の城の合戰に、一番鎗の功名を揚げてより此のかた、鎗師々々は多けれど、名古屋山三は一の鎗と世上に唄はれ、只管武士道を磨いたも今は昔の夢物語。つくづく思へば武士ほど詰まらぬものは御座りませぬ。近き例は先君氏郷公、十四歳の初陣より、信長公太閤殿下御二代に亙つて戰場の功名數知れずといひながら、心みぢかき山風に去年俄に散らせたまふ。（と石田に眼を注ぐ）。秀次公とて先つその如く、罪なき罪に高野の露と消えさせたまひ、剩へ頑是もなき若君姫君、三十餘人の上臈たちまで三條河原にて打首とならせ給ふ慘たらしさ。不破伴作が太閤殿下に繋がる淀様に遺恨を含み、最前の振舞もあながち故なき亂暴狼籍とは言はれますまい。（と淀君と三成とをヂロリと見る）　しかし、其の伴作もあつたら武士道だてしたゆゑ、某が刄に掛つて無慘の最後を致しました。其れにつけても、武士道サラリと止めて、浮世は兎角茶にして暮す事と覺悟いたしました。

淀君　では、知行取りになりたう無いと御言ひやるか。

山三　知行取りは愚か、天下將軍になつたとて、榮華は浮べる雲。恐れながらあなた樣とて、今こそ太

閤殿下の思ひ者として天が下に時めきたまふとも、漁陽の貝鐘に驪山宮の夢驚かせし楊貴妃の例も御座ります。

石田　や、楊貴妃の例とは、淀様に對して不祥の一言。

山三　さ、石田殿とても其の通り。佐和山城に草生えて、山河空き時節の到來せんも圖られず。

石田　やあ、豐臣の天下を調伏の詞の端々。此のまゝ容赦は出來ぬ。

淀君　治部殿。御待ちやれ。して、山三。そなたは氏鄕が横死と決しても敵打つ所存は無いのぢやな。

山三　如何にも、武士を捨てた某の眼から見れば、敵打などゝは淺ましや、此世からなる修羅地獄。そは最前の伴作が好い手本で御座ります。

淀君　何と言やる。

山三　さ、あなた樣を失ひまゐらせたとて、秀次公が生歸らせらるゝものでもなし、其れに、あなた樣は何事なうて、伴作だけが自滅をいたしました。頓と埋まらぬ事では御座りませぬか。

石田　山三。そちは命が惜いと見えるの。

山三　人は愚か、鳥畜生まで、命を惜むが自からなる生類の情でありながら、死を見ること歸る如しなどゝ、それこそ武士道の大嘘。のう、國。最前もいふた通り、身共は侍らしうなう何時までも生きるのぢや。

阿國　私も一所に生きまする。

石田　はゝ、卑怯な奴の。しかし、世上で風聞いたす通り、飛驒守には上樣が毒を御かひなされた、と身共がいふたら何と致す。

山三　其の敵なら疾うに取つて居りまする。

淀君　何ぢや、敵を取つたとは。

山三　淀樣、あなた樣は某と寢屋の契りこそかはし給はねど、此の山三を戀して入らせられませうがな。

淀君　え、うとましや、妾がそなたに戀したとや。花の色香をめづるが戀ならば、大かた其れも戀といふのであらうわいの。

山三　いや花を見るのに同じ花見る人を嫉む例の御座りませうか。今日あなた樣が此れなる國への御仕向けは、同じ花見る人を御嫉み遊ばす御心。其の嫉み心は卽ち某に戀をなされた證據で御座りますさ、太閤殿下の御側女たるあなた樣に戀せられたは、殿下の御命を取らぬ代りに、殿下のいとしい物を拙者が取つたので御座ります。最前伴作はあなた樣の命を果して敵を取らうと致しましたが、此の山三は其うでない。あなた樣の御心を奪うて敵を取つたので御座ります。石田殿。其の方が命に危げのないだけ、伴作よりは何と智惠で御座りませうがな。

石田　さすれば、そちは豫てより上樣に遺恨を含んで居ると申すか。

山三　いやさ、御氣にさへられますな。もし上樣が左樣であつたらばと申す言はゞ物の譬へ。武士道やめた某に敵を取るの取らぬのと御尋ねなされますは、近ごろ野暮な沙汰かと存じます。

淀君　其れほど武士道やめたといふそなたが、何として、出世がしたいの、蒲生家の跡目が心配ぢやのと、妾に賴み事をしやつたのぢや。

山三　其れはあなた樣へ近寄らうばつかりの申譯で御座ります。あなた樣といふ御方は、己より弱い者でなければ打解けなされませぬ。其れゆゑ、あなた樣よりも弱い者に見せかけやう爲、左樣な心にもない事を申しました。して、あなた樣は其れを眞に受て、自らは山三よりは強いものぢや、自分より弱き此の山三は屹度吾が物ぢやと思召したので御座ります。

淀君　でも、強い者は矢張妾ぢや。

山三　いや、あなた樣は餘に御身分が御高う御座ります。して榮華にあこがれて入らせらるゝ。其れがあなた樣の大きな弱みで御座ります。此の山三は、武士を捨て、忠義を捨て、世の名聞を捨てゝ、何ひとつ屈托もせねば、其の上あなた樣を戀に落したゞけ此方の強みで御座ります。

淀君　聞くも忌はしい、又戀と言やるか。

山三　でも戀をなされたから是非が御座りませぬ。大かた世の戀といふものは、男女二人で酒を飲合ふやうなもの。二人が醉へば一人は屹度醒めて居りまする。醉ふた者は前後不覺で御座りますが、醒

めた者は何も彼も能う知つて、相手の狂ふを見て居るのが面白いもので御座ります。其の醉ふたあなた樣を、もつと醒まさずに置かうと思ふて、國は他人ぢやと申しました。さりながら、いとしい國が其れ聞いて、無念さうな顏のいぢらしさに、つい心の底を言うてしまひました。あなた樣の御爲には、一日も早う其の醉の醒めたのが御仕合かも知れませぬ。

阿國　山三樣、お前は其れで、あの盃を受けて下されましたか。嬉しう御座ります。

山三　あの時、そなたは嘸辛かつたであらうの。

阿國　あいなあ。しかし私も淀樣と同じやうに矢張醉ふて居るのを、お前はシラフで面白がつて居るのぢや御座んすまいか。

山三　身共は左樣思はぬ。そなたは淀樣より若い。して淀樣の時めきたまふは太閤殿下といふ後楯ゆゑぢやが、そなたの時めくはそなた自らの藝ぢや。ぢやによつて身共はそなたに惚れたわ、吾等は二人とも醉ふて居るのぢや。其の醉ふたまぎれに、身共も今日から歌舞妓ものとなつて、そなたと仲よう暮らさう。

阿國　あいなあ。もし、淀の方樣。まこと此の國は、是まであなた樣を羨ましうも思ひましたが、今日といふ今日、私があなた樣より仕合者ぢやといふことを覺りました。

淀君　山三と添ふのが其れほど仕合せか。

阿國　いや添はいでも、あなた樣より私の方がいとしがられて居ると思へばで御座ります。

（途端に、簾の外の椽先から若君が兜人形をさげながら駈けて入らせられる。）

若君　母上。菖蒲兜がこわれたわいの。

淀君　おゝ、若。よう御ぢやつた。（抱占めて）でも、矢張妾の方が仕合せぢや。此の若の母ぢやもの。天下の母ぢやもの。

石田　如何さま、其の秤目なら國は叶ひませぬ。

阿國　ほんに、年ふる花のあなた樣は母御といふ事を名譽になされませ。まだ若竹の此の國は人の妻ぢやといふ事を自慢に致しまする。

大藏局　でも、山三の妻が何の自慢にならうぞ。

淀君　其うぢや、妾には太閤殿下といふ立派な夫がある。

山三　さ、それだに忘れたまはずば、此の後も餘の人と戀をさせたまふな。

淀君　妾は何時も戀はせぬ。妾の望みは榮華ばかりぢや。

（此間に淀君の膝から放れて簾の外を眺めて居らせられた若君は空を指して）

若君　母上、兜の代りに、あれ、あの御月樣が玩具にほしい。

淀君　おゝ、お月樣が玩具にとは。若。能う言つた。

石田　いかさま、殿下の御胤は爭はれませぬ。

山三　はゝゝ、月が玩具とな。人間の望みは大かた其のやうなものぢや。

阿國　私等は其んな望みをやめて。

山三　國。そなたと一所に退出しよう。

（立上つて、阿國の手を執る。阿國ニッコリする。山三は淀君と石田の方を振向いて冷かに笑ふ。）

―幕―

大正十四年二月一日印刷
大正十四年二月五日發行
大正十五年八月一日再版印刷
大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
第三卷

著者　松居松翁　高安月郊　山崎紫紅　伊原青々園　岡鬼太郎

發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　守岡功

印刷所　東京市下谷區二長町一番地　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番二一八八番
振替東京五二二九八番

（非賣品）